

伝中院通躬筆『狭衣物語』卷一翻刻（下）

青木祐子・鈴木幹生・勝亦志織・近藤さやか・千野裕子

はじめに

本翻刻は、前号に引き続き、学習院大学文学部日本語日本文学科蔵、伝中院通躬筆本『狭衣物語』（91337/5004）を翻字したものであり、今回で巻一の翻刻が終了する。翻刻の凡例は前号に示した通りである。なお、書誌情報を末尾に付す。

三十二 源氏の宮と堀川の上の碁

源氏宮はふるきあ／と尋給へりしちさやかにみあはせ給はすことのほか／なる御けしきをされはよとつらく心うきにいまはた／おなしにはなるとひたふる心もいてきてさるへき／ひまをみ給へと人めこそかはる事なけれとあさま／しううかりける御心はへのうとましようおほされて又／いかてかさるみ、たにきかしよういし給へれはいはの／水のつふく／と聞え給ふへき人まのほとたにそさら【41ウ】にありかたかりけるひるつかたまいり給へれは大宮も／こなたにおはしましてもろともこいうたせ給なりけり／とくまいりてけんそつかうまつるへかりけ

りとてちかや／かにも給へるにちいさき御木丁などをしやられて／つねよりもはれくしければ宮はいとはしたなしと／おほせとは、みやのみ給へはれいのやうにもえそむき／給はず御かほはいとあかくなりてこもうちさしてこはん／にすこしかたふきか、りて御あふきをわさとならず／まきはし給へる御かたはらめ御ひたいつき御くしの／か、りなといまはしめたる事にはあらねとうちみた／てまつることに猶たくひあらしと見え給御ありさま／のうつくしきは千夜を一夜にまもりきこゆとも【42オ】あくよあるましくおほゆるにもあすかるのやとりはたは／ふれにてもあさましくおほえ給にいと、しき涙こほれ／給ぬへければまきはしにさてたれかせんをはなど／きこえ給へとみつけ奉り給てれいのまつこと／お／ほしたらねは大宮もなをと聞え給はて夜へうち／よりこそたひ／たつねさせ給しはいつこにもし／給しそなをか侍従の内侍のもとにせうそくものし／給はぬはひか／しきこと、むつかり給めりきこゝに／はた、なにことも御心にまかせてと思ふにいさやいか／なるへきことにかうちなけかせ給へるも人のおやけな／くわか

うおかしき御ありさまなりその御いらへはいか／にとも聞え給はてとの、れいなぬ御けしきなり【42ウ】なりつるはこのかんとたうにこそ侍けれとう院のにし／たいの御しつらひはなに事にかはと聞え給へはこき／さいの宮に有けるはくの君のむすめはかこつへき／ゆへやありけんは、うせてのちはいとあはれにてなど／き、給てけるをかのうへのむかへとりてつれ／な／くさめにせんとなんの給とそありしさやうのれうに／やあらんをのこ、のいとあやしきもあなれと宮の少将／になんたるとてかの宮のこにし給となんき、／しそもさるへきやうやありけんなどの給はすれは／それも殿の御こにてあれななにかしにはにぬに／やあらんはらからあまたもたる人こそうら山しけれ／しのおへき人たになきにとてもあはれとおほし【43オ】たるけしきのけにた、みる人たに心くるしけなる／御さまなれば大宮れいのゆ、しきことにくちなれ／給へるこそ心うけれとていといま／しくおほしたるを／かはかりのことをたにかくおほしたるよ行すゑはか／／しかるましき心の中を御らんせさせたらはまいていか／になと思ひつ、けらるゝに涙もこほれぬへしちいさき／木丁に宮はまきれ入給ぬればすさまじくしてはし／つかたに人々と物かたりし給に御まへの木たちこく／らくあつかはしけにみゆる中にせみのあやにくにな／きいてたるを見いたし給て／□□こゑたて、なかなぬはかりそ物思ふ身はうつせみ／におとりやはするなとくちすさみにいひまきはして

【43ウ】蟬黄葉にないて漢宮秋なりと忍やかにうち／すし給御聲めつらしけなき事なれとわかき人／はしみかへりめてたし

と思ひたるもことはりなりさは／かりあたりまてにほひみちてむかひ奉る人は物／思ひもわするゝやうなりあいきやうなどをひとへにほこ／りかにもてなし給はていたくしつまりて心ちよけ／ならず思ふ事有けるにのこりおほかる御けしき／にており／／はものおもはしけに心ほそけなるくち／すさみなとのみし給へはあらきゑひすもなきぬへ／き御ありさまなり

三十三 飛鳥井女君との逢瀬

日のくれゆくま、にひもとぎ／わたす花の色ゝおもしろうみわたさるゝに袖より／ほかにをきわたす露にけにたまらぬにやとなかめ【44オ】いたしてとみにもたち給はすむしのこゑ／／野もせ／の心ちしてかしかましまてみたれあひたるを我た／にもとかしうおほされけり月いて、ふけ行けしきに／かのほとなき軒になかむらんありさまもふと思ひ出／られ給おほほるけならぬおほえなるへしおはしてみ給へは／おほしやりつるもしくしとみなともまたおろさて／はしつかたにそなかめふしたるこさらましかはあはれ／にて袖うちはかしてこまやかにかたらひ給にひるの／御ありさま思ひいてらるゝ、によろつにこよなきめ／うつしなどはなにのなくさむへきそと思ひいてられ／なからわさとけたかくまことしきよりは中／／さまかは／りたるうちとけなどよりはしめものはかなげに【44ウ】らう／／しからぬもてなしなどのあやしきまてらう／たくみてはえあるましくおほせは思ふ事かなふま／しくはありはてしと思ふ世にほたしとまてやな／らん思ひつ、けらるゝ、にもれいのもろきなみたは

／まつしるをいか、心うらんとつねよりも物なけかしけ／なるけしきのあはれなれは久しく世にえあるま／しき心ちのすれは世の人などのやうなる心はへなと／もことになくてすくしつるをいかなりける契にかは／かなくみそめ聞えてのちはみすてんことのおはれに／おほえ給をさらはいか、はおほさるへきそをたにのち／のとたれいひけんあふにはかへまほしかりける物／をとてをしのかひ給へるまみすこしぬれたるなと【45才】さやかならぬ月かけにこれは猶音にき、わたる人／にこそおはすめれ我身のほを思ふにも猶たの／むへき御ありさまかはかやうにおほしすてさらんほと／はかりのは風にまよひなむこそ心にくからめと思へは／けに涙とりあへすこほれぬるもはしたなくて／かほをふところにひきいる、ま、に／□□花かつみかつみるたにもある物をあさかの／ぬまに水やたえなむものはかなけにいひなしたるけ／はひなとわかひたる物からうたし／□□としふとも思ふ心しふかければあさかのぬま／に水はたえせしかくいとうきことと思ひ給ふともな／からへては心のほともいまみ給ひてんならぬなを【45ウ】さりことなどは人はいふものともしらすりけり心より／ほかの事をのつからなんあるともわたくしの心さしは／かはらしと思ふなと心ふかけにかたらひ給ま、にいと／かなしうなりまさりて猶かくなどやほめかして御け／しきをみまほしと思ふも思ひたつかたのこととてす／こしわか／しきさまにたにあらす中／おほしやらんに／もあさましうはつかしければた、ゆくゑなくてやみなん／と思ひとるかたはつよきものからあさましかりける／心のほと

かなとしはしはいかにおほしいてんすらんと／思ふにせきやるかたなき袖のしからみを君はた、ひ／とへにわかひたるさまにてわかゆくゑなきもしなし／などはつらきかたに思ひたると心え給ひてとかへる【46才】山のしあしはとのみ契給けり

三十四 今姫君、洞院の上に引き取られる

まことやかのおほきお／と、の御かたにはこの君むかへとりてにしのための玉／をみかきたるしつらひすへ給てみ給にあてやかに／さてもありぬへきさまなれはとし比のほいかなひて／はれ／しともてかしつき給ふさまよつかぬまでみゆ／殿のうちにも世の人はいみしかりけるさいはひかなと／めてけりとしは廿にそなり給けれといたうおほ／ときすきてあまりいはけなくものはかなきさまに／てけにおほろけに思ひうしろむ人のはか／しき／なくはうしろめたけにそおはしける心に思ひあまる／事ありとも色にいたし給へうもあらすことのほか／にあさましき事なりとも人たにもてなさはをの【46ウ】つからしのひすくしつへくおはするをよき女のかしつ／かれ給たるはかくこそおはすへけれとみゆる物から／あまりむもれ給へるけしきなとはかくはな／とも／てなされ給へる御ありさまにはたかひて行すゑや／いか、みなされんと心くるしかりける又なきものに／思ひかしつかれたりしおやの御もにてたにかくはるけ／ところなかりし御心はへのまいてにはかには、にもを／くれかなしうせしめのともうちつ、きうせにしかは心の／うちにはいとかなしかりけるにまめやかに思ふ人たに／そはてかくしらぬ所

にむかへられてありつかすは／れはれしうもてなされ給に我にもあらぬ心ちし／てほれまとひ給へりうせ給にしは、のしそくのため【47オ】きましらひして人かすなれて世にありわふるさ／すかにゆへつきものみしりかほにてかたはらいたき／物このみさらすとおほゆる有けりをはのあま君かゝる／人よひとりてそへたるけにゆへ／しきけしき／にては、しろにしたりうへ時／み給にいてやと物／しくみ給へはこまかなる御心さまにはあらてさすか／におほとかにて人のありさまなどはいたうもみし／り給はすうはへはかりはかしつき給にこの御は、しろそ／あしくせはかたはらいたき所も有ぬへかりける心に／まかせたるつくりおやともしたてたるわかうとの思ひ／やりすくなきかきりかすもしらすあつめさふらは／せて夜となれば殿上人諸大夫までいたしあはせ【47ウ】てさほくけしきともいいまめかし君はた、あか／このむつきにつ、まれたる心ちしてあるにもあら／すまかせられ給へるしつらひさまなどのめてたくおなし／わか身とおほえぬを人しれぬ心のうちにはは、やめ／のとなにこれをもせたらましかはいかて人なみ／になさんとあけくれない思ひたりし物によしなき人／にまかせられて心に思ふ事もいはまほしき事も／つ、ましくはつかしうてやみにむかひたるやうにおほ／ゆること、思ひつけては忍てうちなき給けりされと／た、みるにはうつし心もなきやうにてそおはしまし／ける

三十五 中納言に昇進した狭衣、今姫君のもとへ

九月ついたち比なをしもの、あるに中将の／君中納言になり給にけり大殿これをもいま／【48オ】しけにおほしたれとさのみやとてしたいのま、にあ／かり給なるへしよろこひ申に内春宮なとまいり／給とてつころひたて、まつ殿の御かたにまいり給へるにかたちありさまなどつかさくらゐにそへ／てゆ、しきにのみひかりまさり給をこといみも／しあへ給はぬけしきにてたちぬつころひ給けし／きそこはりにもすきてかたしけなくあはれけ／なりけるおほきおほい殿の御かたにまいり給へる／つゐてにこのいま君のすみ給にしたいのまへ／をすき給まゝ、にいかやうにかとけしきもゆかし／ければわたとのよりすこしのそき給へはみす所／／をしはりて人々あまたけはひしてこほれいて【48ウ】たりのかささいの宮の人々もあまたなまいり／けると人のかたりしも心はつかしうまた見給はぬあ／たりなればよいいしてあゆみいて給へれば人々見／つけていりさほくけはひともいとものさはかしきを／あやしとみ給に木丁ともおくよりとりいて、かは／／そよ／／とたてわたしすそうちひろけひとも／のよろはれたるをとひきかくひき廿人はかりた／ちさまよひつころひさはくきぬの音木丁などの／を／ものも聞えずあはた、しくみつかぬ心ちし／給へといまやそ、きやむともいはいはてつく／／と／ゐ給へはからうして木丁たて、のちをの／きぬ／のすそ袖くちわらはへのかさみのすそなどのみた【49オ】りかはしくなりたるをつころひ給てこ、か

しこより／をしいてわたしやう／のとまるにやとおほゆる
ほと／に木丁のほころひをはらく／ときさはくを／ともしる
くてひとつほころひより五六人かほをな／らへてまつ我みん
／とあらそひたるけはひとも／のしのふるからにいかし
ましからうして見えたる／にやあらんまことにめてたかりけり
あな物くるはしや／日比見つる殿上人などはた、へちなりけり
とさ、／めきあへるいとうゑ／しう侍るもとかめさせ給へく
／やとらみまいらするなどの給御けはひけにお／ほろけの人
はふといらへにくけにはつかしけなれ／はにやそこらいし／
と聞ゆる人御いらへきこゆる【49ウ】はなくてそ、やまつはふ
ようなり君の給へ／と／さ、めきしろひさ、めきたちてにく
るもあるへし／あなわりな物にくるふ君かなまろはましてこせ
な／りとてそ、はしるなれはきぬのすそをひきと、む／るにと
らふるにやたうれぬきう／とことさ、め／きわらひ入つ、し
はふきにし入もありあるはまた／あなかまや／さはかりはつ
かしき御有さまになへ／ての程と思ひ給ふかなともせいするな
りさま／／あやしき心ちし給てしりめはつかしけにみいれつ
、／なけしにをしかりてゑ給へるけしき此みすの／まへには
あはすそありける猶た、きえ入／あふき／なとうちならしつ
、わらひそほる、けはひとももの【50才】くるをしければこは
いかにとようるまのしまの人と／もおほえ侍るかなとてすこし
ほ、ゑみ給けしきな／とみすのうちはつかしけなり

三十六 今姫君の母代登場

おくより人よりきて／木丁のまへなる人にた、うらみ哥をはた
とよみ／かけよとさ、めくなれは我君そなめこゑはよき／まろ
はさらに／わらひいれはあなまはゆの色／このみやとてかた
のわたりをあふきしていたくうつ／なれはたうしは君なしとて
つむなるへしあしうし／てんけりいたし／そこはなて／と
しのひあへ／ぬこゑいつくならんとおかしきにしぬへければた
ち／のきなんとするほどにおとなしきこゑのたかやか／にした
りかほなるいてきていてやさふらふ人／から【50ウ】こそよき
人はおかしき名もとらせ給わさなれはかは／かりにてはわか人
たちさふらひ給はてありぬへしと／さすかにしのひてにくみわ
たしてさしよりて／きこゆめつらしき御こゑこそおほしたかへ
たるかとして／□□よしの川なにかはわたるいもせ山人のため
／なる名のみなかれてとけにはたとよみかくるけは／ひしたに
のとかはきたるをわかひやさしたちていひ／なすこれそのは
、しろなるへきとき、給ふ／□□うらむるにあさ、そまさる
よしの川ふかき／心はくみてしらなんおほつかなき心ちし侍り
つるに／うれしき御けはひと思ひ給つるに物をこそあしさま
／に申ない給ひけれとの給へはさはやかにかにうちわら【51才】ひて
さらは今よりのけさんをまめやかにつとめさせ／給へかしわか
き人々の思ひむせふめれはいぬもときて／とかやたかやかにい
ふいとあやしきたとひなり

三十七 狭衣、今姫君の姿を垣間見る

まめやか／にはおもてふせにやおほさるゝとていまゝてまいら
さ／りつるをけふはかはるしるしも御覽せられむとてなん／お
まへにかくと聞えさせ給へこのみすのまへはならひ／侍らねは
はしたなく思ひ侍れとかくこんのうすさに／けふはかりはなく
さめ侍をいまより後そうらみきこゆへ／きとてたち給に荻のう
は風のあらゝかに吹たるに／にはかにみすをたかく吹あけて木
丁もたふれぬれ／はとみにひきなをす人もなしあなわひしあれ
を見／給へ／といひつゝ、我も／きぬをひきかつきつゝ、ひ
【51ウ】とつにまろかれあひたる程にのと／とみいれ給へ／
はかうそめににひ色のひとへくれなぬのはかまの／きはみたる
をきてひるねしたる人とのさはくにおと／ろきてあふなくおき
あかりたるにいとよくみあはせ／てあさましきにやとみにうち
そむきなとせずあき／れたるけはひかははいとおかしけなめり
心なのさま／やとはみえなから女の有さまともよりはこよなく
みつへ／かりと思ひまし給つかのせうとのかこちけるゆへに／
や少将にもいとよくにたりける殿の御事はいふへく／もあらさ
りけりとみるにたゝならずや思ひ給ふらん／やうのものとおや
しの心はへやと我なから心つきなし／は、しろからうして木丁
をこしつればたちのき給ぬ【52オ】

三十八 狭衣、今姫君について堀川の大殿と語る

又の日殿の御まへにてきのふの事ともなと申給つゝ／てにかの

とう院にはものしたりきやにしのたいにす／むなる人をこそま
たとふらはねいかやうなるけしきか／みゆるとの給うち／の
ありさまのいとあやしきをこ／なからもいかゝみ給ふらんとは
つかしうおほすなり木丁／のほころひあらそひしきかけとも
思ひてられて／いとおかしきをねんするけしきやしるくみ給ら
んう／ちわらひてよしなきものあつかひこのみ給ほとに／たか
ためにも中／なる事やとこそみゆれとしころ／かくいふもの
ありとはきゝ、しかとおほえぬ事なれば／かやうの人のすくなき
くさはひにもとりいてぬ物を／なにのたよりにかくまでもあり
そめにけるにかと【52ウ】ありつかすやとうめき給もけにとは
きけとあさま／しとあきれたりしかほはさすかにくむへうも
あら／さりつればつれ／におほされんにこと人よりはなと／
かあしうも侍らなしたしかなる名さしにてとかくさす／らへ給は
んもいとおしう侍るへしとその給いさやかくいひ／そめけんも
おほえなくそあるや夜めにみしかは宮の／少将こそいとよくに
たりしかせうとのしれものあなり／それもかの宮の御子とそい
ふなるこれもさなるへし／などの給

三十九 飛鳥井女君をめぐる乳母の対応

まことかのあすかあにはめのとみないて／たちて君をさへひき
くせんもいとくるしうざりと／てとゝむへきならねはさすかに
思ひなげくに人／しれぬねのみなかれてたれをたのみてかはた
ちも【53オ】とまらん山よりもふかき谷にいらんもさてこそは
なと／思ひ侍るもわか心と思ひはなれ聞えんことはしのひ／か

たくあはれにおほゆるもかつはことをこかましき／心と思ひたるけしきのいとをしきをみるにさ／らはなにかはくたらせ給京にもたよりなくてひとり／と、まらせ給はんこそうしろめたうも待りめ又我も／いかにともおほしめさめ女は千人のおやめのとやくなし／御おとこのおはせぬほとなりまいてかくやむことなく／ものたのもしき人にもおはずなり御心さしいとねん／ころなるをひきはなれてか、るあつまちにたち／そひ給はんいとあるまじうかたしけなしなとさかに／あるへきことをはいひなからいかに思ひかまふることか【53ウ】あらんこの人のおはするよひあかつきのかとも心やす／からすかきうしなひかちにもてなしつふやくけはひ／御ともの人さき、てめさまじうあさましきにふみ／こほちていりなまほしきおり／ありけり殿にもし／のひてたれと思ふにかかくなと申せは女のけしきの／あやしうのみあるはこのみしほかけの女のありし法の／師にとらせんとするなめりさやうのことに思ひむす／ほ、れたるなめりと心え給いと心つきなくゆ、しけれ／と女君のありさまのあやしくのみ見ゆるはいてやさら／はとてやむへくもおほされねはいかにせまし殿にさふ／らふ人々のつらにてやあらせましと思へと人しれす／思ふあたりのき、給はんにたはふれにても心と、むる【54オ】人ありといかてきかれ奉らんと思ふ心しふかければさも／えあるましさらてはさすかにこ、かしことあつかひ給／はんもいかにそやとおほされつ、いまをのつから我とし／りなはいとはしかくろへぬへきところもありぬへく／は有さまにしたかかひてとおほすなるへし女君にも／おい人のにく

むなるへしなことはりなりやたのもしけ／なりしりのしをひきたかへてかく物はかなき身の／ほとなれはをとなしの里たつねいてたははいさ給へよわ／つらはしき人のさすかにあれはしし人にしらせしと／思ふほとにかくおほつかなくあたなる物におほしたるも／ことはりなり我はなに事にてかはあなかにしら／れしと思ひ給へきいひしらぬしつめなりともこれ【54ウ】よりかはる心あるましきを猶たのむ心のあるましき／なめりとうらみ給へはさそふもたにあらましかはと物／あはれに思ひてこの別當の少将とおもはせ給へる／なめりせいすへき人ありなどの給はと思ふにもかり／そめにうちたのみて行へきかたを思ひとまらんこと／はあるまじうおほえなからいとかくめてたき御あり／さまにてなつかしう哀にかたらひ給を行かたのめや／すからんにてたにいかてかはあはれならさらんもりの／うつせみとて涙こほれぬへきをまきはしたるけしき／いとうたてけなり

四十 飛鳥井女君、懷妊する

かくいふ程にこの女君た、にも／あらずなりにけりうちはへて物をのみ思ひてありし／さまにもあらぬけしきなるをたれもた、この御いて【55オ】たちを思ひなけき給つるとみるにしろきことともあり／てめのとみしりていてあないとおしやか、さへなり給へ／るものをいか、せさせ給はんする君に猶聞えあはせ奉／り給て御けしきにこそしたかひ給はめかくなり／給へるとき、給てよもあた／しくも思ひ給はしと／いへはいかなりと

もたのむへきありさまならばこそあ／らめみえぬ山ちのみこそ
よからめといふ物からけにか／くさへなりけるを露しらせて
やみなんことなといみ／しうおほゆれとかけてもまいていひつ
へきにあら／ねは日をかそへつゝなきなけくより外の事なし

四十一 狭衣の乳母子道成、飛鳥井女君の乳母と謀る

この／殿の御めのと大貳の北のかたにてあるなりけり／ことも
あまたある中に式部大輔にてらいねん【55ウ】つかさうへきか
かやうの人などの中には心はへかた／ちめやすくてすき／し
う色このむありけりいか／なりともかたちすくれたらん人をみ
んとてめも／なくてすくすにこの女君うつまさにこもり／たり
けるをのそきてみて思ふさまなりければ／せうそこなどしけれ
とみつからはき、いれぬにこの／めのとはいとみ、つきにおほ
えけれどた、いまかく／たのむそうのいひちきりたればえいな
むましうて／たちまちのうけはせねとつかさなとえてくたり／
給はん程にはさもやなと契けるにかくこととも／たかひて身は
たよりなしなまきんたちのいたう／かくろへて夜／時々おほ
するをふさはしからねは【56オ】あつまおとこにつきてやいな
ましとおとすなり／けりされとこの式部大輔おやのともにつく
しへく／たるに思ふさまならん人をなむゐてゆかんとする／と
いひをこせたるにいと思ふさまなる心ちして／別當の御子少將
のかよひてあるなればめのと／うけひかすなんむつかるといふ
人のありけるをよる／こひてせうそこしたりけるにてらにては
あるま／しきさまを聞えしをめのと思ふやうにめてたく／おほ

えてあつまも思ひとまりてまことにさもおほさ／はしはし君に
はきかせ奉らてくたり給はんほとに／むかへ奉り給へといひけ
れはいみしうよるこひて／さやうのほそきんたちにかげめて
おはせんよりは【56ウ】た、心み給へおと、御さいはひにてこ
そおはせめなと／ことよくかたらふいてたちの物なとけによけ
におこ／すれば心ゆきはて、かみしもの人もとめなとしける／
にしきふのたいふのもとよりはくたりもちかうなり／にけるを
さはたかへ給なと日に千たひいひおこ／すればあなまか／し
よにたかへ侍らしそのあかつ／きに御車を給へさりけなうてふ
とわたし奉らん／といひやりて心のうちにはみないてたちけり
君には／いてたちはとまりぬた、ならすさへおはしますにいと
／心くるしうてこのたひはいひはなちてやりつるなりいま／は
とかくおはしまさんをみてそいつちへもまかるへきな／めりと
心ゆきたるさまにていへは女君まこと、【57オ】思ふに心すこ
しおち給ぬうちはへ心ちさへあしかり／つるもおしからぬ身は
とういかにもなりなはやといそかれ／つるをかくなりにけりと
き、あらはしてあはれなりける／契かほと思ひしられてうきと
のみ思ひいられつるをす／こしいたはしう思ひなるもあはれな
り

四十二 狭衣、野分のなか飛鳥井女君のもとに通う

野分たちて／風のをとあら、かにまとうつ雨も物をそろしうき
／こゆるよひのまきれにれいといとしのひてまきれいり／給へ
りいつもなへ／とやつれなし給へるに雨にさへい／たふそほ

ちてにほひはかりはいと所せきまでくゆりみ／ちてとなりの山
かつとも、あやしかりけりかやうのあり／さまはまたならばさ
りつるを人やりならぬわさかなとて／ぬれ御そときちらしてひ
まなくうちかさねてもこゝろ【57ウ】よりほかにへたてつるよ
な／＼のわりなきをさは思ひ／給やかはかり人に心とむるもの
とこそならばさりつれ／なとつきせすかたらひ給て／□□□あ
ひみては袖ぬれまさるさよ衣一夜はかり／もへたてすもかなわ
りなき心いられなとはいつならひ／けるそよとの給へは／□□
□やたつれば袖ほしわふるさ夜衣つゐには／身さへくちやはて
なむといふも物はかなけなりよ／しみ給へよ世のはかなさなど
こそうしろめたけれな／こりなき心などはいかなる人のつかふ
わざにかなとの／給をさしもあらしなとかと／＼しきさまにも
あらず心／のうちにやいかならんめのみへはた、おなし心なる
【58オ】さまにもてなしてかくたしかにいひしらせ給はぬをも
と／やかうやとあなちにもたつねしらす又我身のゆくゑ／も
さりとてうちとけいはぬものなかなよ／＼とらう／たけにて
なひき聞えたるさまあやしうまことにらうた／けなるを見つく
ま、にかきりなき人々の御ありさま／にもおとるましくてわた
るつき物などおほさ、りけり

四十三 飛鳥井女君、狭衣の夢に現れる

れいの夜ふかくかへり給てわか御かたにふし給／てすこしまと
ろみ給へる夢に此女の我がたはらに／あると思ふにはらのれい
ならずくふらかなるをこはいか／なるそか、る事のありけるを

などいま、てしらせ給は／さりけるか、る契も有ければなにか
行すゑをもう／たかひ給ふとて夢のうちにあはれと思ふに此
女【58ウ】□□□行ゑなく身こそなりなめこの世をは江なき／
水をたつねてもみよといふとおほすに殿の御かたよ／りけふあ
すはかたき御ものいみなりけるをわすれさ／せ給にけるあなか
しことよりの御文なとりいれさせ／給などの給はせたるにふ
とさめてむねさはけはをさへて／うけ給はりぬとは聞え給へと
心さはきせられてあやしいか／にみつるそまことにれいならぬ
ことやあらんといまぞ思ひ／あはする事有ける心ほそけなりつ
るはいかなるにかなと／つねよりもおほつかなくゆかしきによ
さりもえおは／すましきなればこまかに御文をそかき給つねよ
り／も今もみてしかとなむよさりものいみなればえ／ものす
ましきにや【59オ】□□□あすか川あすわたらんと思ふにもけ
ふのひる／まはなをそ恋しきまこととくかたりあはすへき夢を
こ／そみつれ心もとなくなとこまやかなれと返ことにはた、／
□□□わたらなむ水まさりなはあすか川あすはふちせ／になり
もこそすれふてつかひもしやうなとわさとよし／となけれどな
つかしうおかしきさまにみゆるは思ひなし／にや

四十四 乳母、言葉巧みに飛鳥井女君を説得

かしこにはつくしの人あかつきになんゆめ／＼たかへ／給など
いひければた、あかつきにさりけなくて車を／ふとよせ給へた
かふといふ事はあなゆ、しといひやり／て女君のひとりなかめ
ふし給へる所にきてあすの／またつとめてこの西に井はるとて

いゑあるしほかへわたりけりいか、せさせ給はんする車のことをたれにいは【59ウ】ましあはれかやうのおりにこそいきしは思ひいてらるれかくの、み中にたよりなきにこそおもはぬ山なくわりなけれいみしう思ふともやもめは思ふことのかなはぬにくちおしきやか、れはえせみやつかへ人はしのひかたらひ／人はまうくるそかしまことくこのとなりのするかのめ／きみこそもの、なさけありていはむ事きかんといひしか／いひにやらんさてこのくら人の少将との、御めのとのいゑかりてしはしわたし奉らんなんてう事か侍らんなどし比／いみしきし人なりこの御ことの、ち中くいとつ、ま／しうてをとつれぬをかくとやき、給ふらんさるにても／あしかるへき事かはといひちらしてたちぬるをあなみく／るしありきもこりにしかはつちいまでもありなんま【60オ】いてそのしらぬ人のもとにはいかでかとの給へはあなまか／くしやた、なる人たにつちいまぬや待まいてかく／おはします人はあなおそろし／といふよるつよりは／かの少将とのみ思ひていかなるひか事いはんとすらんよ／なよな月影もつねにまへわたりし給ふひかりにみ／あはすれはまされ給へくもあらぬ物をと思へとやかう／やとこの事をいはんにもよきこと、思ひたえぬけし／きなるにはいとつ、ましければいかなるひかことも、を／しいてんすらんと思ひつ、くるにももとより物はかなく／あやしかりける身もありさま思ひしられてかくまでも／さすかにみえ奉るは契はあさからす我なからもしら／る、をこの事まことにさもあらはさりととも思ひかすまへ【60ウ】給やうもありなんかしの給契有

さまもざりとて／もとそら事にはあらずやなと思ふに我身すこし／いたはしうなりにたるをこのたのもし人やいか、もて／なしはてんとすらん源氏宮の御かたへと思ひしもか／やうの人に見え奉らんかはずかしさに心こはきやうに／てやみにしをけにかくおもはずなるさまにても見え／奉りけりいまはまいていつ、にもくもさやうのすち／なと思ひたつへきにもあらずかしなどいひくのはてく／はうしろめたうそ思ひつ、けらる、にまくらもうきぬ／はかりになりぬ

四十五 乳母、さらに飛鳥井女君を説得

めのと又きて萬のものとりした、め／さるへきものはぬりこめにをきなとしつ、京の中に／は一夜はかりと思ふましき物そまいてこの井は【61オ】五六日にもなりぬへかめりつ、なとたてんほとまでこそ／はおはしまさめ車もありかたきにたま／くありか／せ給ふもかくうるさからせ給めるになといふめれば君／この給ひつるところかさらは猶いくましとこそおもへ／しらぬ所にいかでかさまてはあらんとの給へはさおほし／めさはときは殿にわたらせ給へといふはこ中納言の／りやうせし西山のあたりなりけりいさ又ひさしうつ／ちをいましとおほしめさは御心なりをのか申さんことは／はか／しからしとかうおはしまさんおりの御ありさま／もさすかにそれまていきて侍らあやしの女のみこ／そみ奉らめと思給にいまく／しきそやさらたにこ／そ子うむにはとようとといふ物はかならずいてくれ御【61ウ】いみのかたにさへあるよこのたのもしき人の御心はへさ／

やうの程とてもかひく／＼しうもてなしあつかひ給へき／＼にこそ
みえ給はねいひおもへはくにてそ侍らんかやうの／＼君たちはお
やなどのいたちたのもしきあたりをたに／＼すこしもうしろみや
めはうちすて給つゝあてやまし／＼てなにかすとかはおもはんあ
なをこかましや又御心／＼さしあらはところかはるともおはせさ
るへき事かは恋／＼こそみちのとさすかにうちわらひていふかく
ほかへいき／＼にく、するもこの人によりてと思ふそかしと思へ
はそ／＼のことにあらずあやしきありさまなればありきもの／＼
うくおほゆるをいさやいと、ものこりしてとの給へはさ／＼てそ
れもあしうや侍けるそれによりてこそかゝる御さ【62オ】いは
ひも御覽すれかしこは中／＼わかき人のおはしかよ／＼はんにお
かしき所なればうちしのひて二三日もあ給やう／＼もありなむな
にかしかれかしと、めて侍れば御つかひに／＼もそこ／＼とをし
へ侍なむおはしましたらんにもよく／＼／＼あない申せよといひ
をき侍ぬなど、と、むるけすとも／＼よひたて、いふもかたはら
いたければさまたつぬる／＼人もあらしといと、おほつかなき
もののに給けふ行ゑ／＼なくはむかし物かたりなどのやうにこと
さらひてやおほ／＼さんまことにかくと聞えはやと思ふに／＼□□
□かはらしといひしゐしはまちみはやときはの／＼もりに秋や
みゆるととかへる山のとありし月影はこの／＼世のほかになりぬ
とも忘れ給へくもなきをいかになし【62ウ】つるそよとあやし
く物心ほそく火をつく／＼となかめ／＼て涙くみ給つるまみのけ
しきいと、らうたけなる／＼をめのとさすかにうちみをこせつ、
心もしらぬ人に／＼うちまかせ聞えてはるかなるほとにいてたち

給はくち／＼をしきさまかなとなみたくれけり

四十六 飛鳥井女君、連れ出される

あかつきに車のを／＼としてかた、くなればいてあはれ人のた
めにま心／＼なりけるするか殿のこゑかなあまりとうさへ車を給
へ／＼るよとてひきいれさするをきくにもむねうちさは／＼きてあ
すか川を心もとなけにの給はせたりつるはよ／＼さりなどはれい
のものし給はんにかやうにいひてか／＼かへり給はんとなを
ものうきもうたである心かなと／＼めのとの物いひも心はつかし
なからおほつかなくて物し【63オ】給はんは心よりほかなる身
のあやしさをまつ思ひつ、け／＼られてうこかれぬをつま戸をし
あけてさらはとうわた／＼らせ給ひね人のいそきかへらんひさ
しうならんもいと／＼をしといひてあさやかなるきぬもてきてう
ちきせくし／＼のはこやうのもの車にとり入なとしていそきに
いそき／＼てをそし／＼とをし出るやうにすれば我にもあらで／＼あ
さり出るに何と思ひわく事はなけれと心さはき／＼してむねつと
ふたかりたる心ちす鳥もいまそ鳴なる／＼□□□あまの戸をやす
らひにこそいてしかとゆふつけ／＼鳥よとは、こたへよなをた、
今などは聞えまほしきとみ／＼にものりやらす涙せきあへぬけし
きをまいていか／＼にとみちのほとのありさま思ひやらるめのと
又人ひ【63ウ】とりはかりそしりにのりぬる

四十七 飛鳥井女君、船に乗せられる

かとひきいる、よりやなく／＼ゐなとおひたるもの見もしらぬす

かたしたる物とも／かすしらす火はひるのやうにともしてあげはてぬさ／きになといふけしきもあやしくものおそろしきに／こはいかなる事そとた、かきくらす心ちすれはきぬひ／きかつきてふしたるにかの行かたしらぬとありしをき、／はしめより月ころいひ契給つることの葉けはひさま／思ひいてられて我身いかになりつるにかと思ふたにのみ／しきによと、いふ所にゆきつきぬれ舟にのせんと／の、しりあひたるにされはこそときはにはあらざりけり／と思ふにもおほえねとめはみゆるにやきしに舟／ともよせてのせうつさんとて廿はかりのおとこのきた【64才】なけなしとやいふへからんつき／しうそ、ろかなるかた／ちなといみしう思ふ事なけに心ゆきたるけしきに／もてなして大貳殿は今とりかひといふ所わたりま／てはおはしましぬらん中納言殿の御ものいみかたか／りつればとみにえいて、をくれ奉りぬるなり御きそく／よろしからざりつればいとまもえ申いつましきなめりと／思ひつるにかうみやうのむまをこそ給はせたなれなと／いひてをくりの人まなるへしおなしほとどの物とも江くち／のわたりのせうえうこのたひはふようなめり大貳殿／いそき給なとほこりかにかうちらわらひたるをなにもの／ならん行幸かものまつりなとにへたうのしりにやおそろしけものさけつ、ある物こそか、るかたちはしたれと【64ウ】みるたにうとましけなるに車によりきて御舟に奉／れねとてかきいたきてのせうつすほとんちいかは／かりかはありけんめのと心のゆきてものいひえむら／ひなとするをきくにねたうかなしともよのつねなり／

四十八 飛鳥井女君を口説く道成

いかなるもの、いつくのせかひにいてゆくにかあらんと／すへていひやるへきかたそなきにた、やかておきはし／りて河におち入なはやと思へたと、今おとし入て／みる人もあるましければた、かしらをたにさしいてす／ひきかつきてふしたりおとこそひふしてえもいはぬ／こともをなくさむれはいと、なきまさりてあや／にくなるけしきなればさの給ともたけき事おは／せしと思へはおこかましやなにかしの少将のかげめに【65才】てみち行人ことには心をつくしむねをこかし給はん／やはあやしとも又かしつき奉らんをとり所におほせ／かしなまきんたちは中／いと心ちあしきものそ殿の／おはしまさんかきりは何かしらははえこそそのきんたち／はあなつり給はざらめさはかりの少将にはならんとおもは、／なりぬへきよしみ給へよらいねんはかりかへり殿上し／て五位藏人になりてそのぬしといつれかまさり／けるとなりいて、みせ奉らんくちおしうほいなしとお／ほすとも今はいふかひなければた、おいらかにもてなしていとしな／しからぬやうにても御心にあかぬ／ことなくやすらかにてすぐさせ給へきむたちならず／とてをのれをはわろき物と人にもおもはれたらぬ【65ウ】はまたこそ女にくみならはされぬ御まへりまさ／りてやむことなき人たち我も／との給つれとう／つまさにて見奉りしより思ひし心なをりかた／くてめんほくなきめをみ侍るにこそおと、こそなを／これ申なをし給へたと、いひあたへつ、かつきたるきぬを／

せちにひきのけてかほをみるにほのかなりしよりも／ちかまさりていと、うたてけにおかしけなれは思ふ／さまにうれしくていかでとく思ひなくさめてあかぬ／ことなくかしつきてみると思ひけりおと、つれ／＼な／りしなこりなくそのあたりのものともてあつかひ／たる心ちうれしう思ふさまなるに女君の御ありさまの／いとあきたくあやにくけになるをいかにみ奉らんさは【66才】かり我も／＼とむこにほしかりし人をすて、かゝる／御けしきはさいはひとこそおほゆれものさまだけ／のし奉るなめりあらみさきといふ物はなたぬ人はかく／よかるへき事はあしうなんおほゆると人さいひあはせ／てなげくをき、ておと、たにさしいて給へやくま／て心うき御心ならんとこそおもはさりしかほいなき／やうにはいかてかおほささらんざりともいとあやしやと／てもうけなるけしきなり

四十九 飛鳥井女君、狭衣からの饞別に道成の正体を知る

かはこやうのものあけさ／せて人々させたりつるあふきたき物などやうのもの／とりいて、はか／＼しからねとある人々にものし給へ／かゝる人おはすへしともしらざりしにいかてかき、けん／しのひて人あてゆくなりとてそれかしかれかしなと【66ウ】いひてとりちらす中に女のさうそくの心ことなるか／あるをこれはまろか中納言殿のたれとしらねとて／ゆくなる人にかならずきせよとて給はせたりつる御／心さしのまゝに奉り給へ御なみたにいたうしほれぬる／なめりなといふをけにな

へてならぬ色あひにこそ／待めれとなとめてあたり又この御あふきもた／まへりつるをあたらしきよりはとて申とりたるめは／つかしき人にもこそあれいたうなれたりとおしませ／給ひつれとかたみよとて給はせつるそはかなく／うちもたせ給へるかやうのものともさへそなへての人／にはにさせ給はぬやといふをきくにもこれはさはこの／うつまさにてき、し物にこそあなれとこと人にた【67才】にあらてあな心うのありさまやと思ふにかなしければ／なき入たるにこの御あふきをさしよせてこれ御覽／せよやいかにして一もしもみはや／＼とたかきも／みしかきも心をつくしてさばく御てよこれみ給は、ま／ろかにくさもなくさみ給なんといふはまことに我みし／おなじものにとゆかしきに人めもしらすおきあか／りてみつへき心ちすれとかほなどのあきらかにみ／えければなをなきふしたるをわか君をこそかやう／に恋かなしめそのあをひれおとこによりていのち／たえぬへくみ給こそかへりては心つきなけれなにこ／とをいとさまては思ひ給そまろかかほはこよなく／よきそみ給へ／＼とあまへてきぬをせちにひきあ【67ウ】けんとするにかみ佛か、るめみせ給はてとくうし／なひ給てよとなきこかる、さまのあまりうたてく／あれはむつかりてたちぬるまに此あふきをとりて／みればた、一夜もたまへしなりけり

五十 飛鳥井女君、狭衣の扇を見る

うつり香※(の)な／つかしさはうちかはし給へりしにほひもかはらてま／なかな、とかきませ給つるをみればわたる舟人かち

／をたえなと返さか、れたるはそのおり我としりてか／き給つるにはあらしなれとた、今我みつけたるは／ことしもこそあれといかてかかなしとおほえさらむ／かほにあて、なかる、さまゑもみなおちぬへし／□□かちをたえいのちもたゆとしらせはやな／みたのうみにしつむ舟人【68才】□□□そへてけるあふきの風をしるへにてかへるな／みにや身をたくへましなと思ひつ、けらる、も物の／おほゆるにやと我なから心うしけさは御ふみありつらん／いかにひて返しつらん又いかにまぢき、ておほしつ／らむあすか川とありしおりか、らん物と思ひかけさりし／□□うみまては思ひやいりしあすか川ひるまを／まてとたのめし物を心えぬ夢とありしはいかなり／けるにかときゝたにあはせてやみぬるいふせさよた、／ならぬ事をいかてかしらせたてまつらしとなて思／ひけんざりともいまずこしあはれとおほしいてましと／思へと又うちかへし思ふにかなはていのちなからへは／行すゑにき、あはせ給やうもありてさてこそあれ【68才】ときかれ奉らんもいまずこし心うかりなんかしなど／てさしはなれたるあたりたにあらてかくしたしく／よろつき、あはせぬへきゆかりにしもありけんとき／ほとまてゆきつきてこのありさまをみあつかはれぬ／さぎにいかにしてもしぬるわさもかなと思へは五六日／にもなれと水をたにとりよせず

五十一 飛鳥井女君、死を決意する

めのときつ、／よろつにいへといよ／かくうかりける心をし

らてとし／ころおやのおなし心にたのみすくしけるさへ心う／くおほゆれはかしらもたけみあはせんもつらうかな／しくてき、もいれすた、ひきかつきてふしたり／おともしはしはいかてか心ならぬことなればひんなし／とおほさ、らんさのみもあらしと思ふほとにいとあ【69才】さましくていのちたえぬへきさまなれはかくまでお／もふへき事かといとあやしく心つきなくさへおほえ／てあやにく心もつきまさりてとかくひきうこかし／うらむれは思ひわひてをしはかり給ふやうにいとかく／思ふへき身のほとありさまならねはひなしなどには／あらず心ちれいならずのみもとよりありしかいと、／まさりて昨日けふはなからふへき心ちもせぬなり／今はいかなりとも御心にこそあらめといとかくおほ／ゆる程をすくし給へ人のちかきもいとくるしう／おほゆるはいかなるへきにかとなくけはひなとけに／いとたのみすくなげにきえ入ぬへきさまなれはた、／ならぬ人は心ちなとつねにあしうすとかやさやうに【69才】てかかるにやいとかく物なとくはてはかやうの事も／あしからんなる物をといておそろしきわざかなとさす／かにいとをしめていたくもあやにくた、すすくれたる／僧ともにいのりせさせなとよろつにもてあつかひ／つ、はひよりてほとさまかうさまにいひうらむるをきく／たひことにいかにせましかくうきをしらぬいのちなか／さにてつゐにいかならんと思ふにすへきかたなけ／れはこのうみにやおち入なましと思ひなりぬ

五十二 狭衣、飛鳥井女君の失踪を知る

京に／は夜もすからおほつかなく思ひあかし給て又の日いつ／しか御文つかはしたるにかとさして人のをとせぬ／はあやしうて猶た、けはいみしけなるけすのいて／きたるにとへはしらす夜へこの殿にはやとし侍し【70才】なりつくしの豊後といふ人のこのたちぬる月に／この殿をかひ給てしなりけふあすそわたり給はん／するそれやおほし所はしり給らんをのれはた、人なり／こよひあよとありしかはまうてこしなりといへは／かくすめりなさて／やまむやはなとおとしをきて／となりの人さにとへとたしかにいふ人もなければま／いりてしか／／など申せはいとあさましくあへなしと／もよのつねなりいかにもめのとかしつるわさにこそ／あらめみつからの心にはなに事のつらさにかはたち／まちにゆきかくれんとも思はんいみしくとも我心と／さやうにはあらしとみえし心さまを今まてかくてをき／たりつるけそかした、ありし法師のとり返しつる【70才】ならんいかはかりねたしと思ふらんとしらぬにはあらさ／りつれともてさはかんもさすかにいかにそやおほえ／てかくなしつるもあまりなる我心のたい／しさ／そかしあすはふちせにとありしもか、るけしきみ／てやいひたりけんと思ひつ、けらるゝにいみしく／ちおしなに事もたくひありかたくめてたかりし／にはあらてた、なつかしうあはれとおほえつればたちま／ちにみしとまてはおもはさりつわれかくゆくゑな／くなしつるよとおほすにむねふたかりてつく／／となかめくらし給ふま

ことしくやむことなききはに／こそあらさらめさるかたのした草のかこともなくさ／めつへかりけるをまことにおそろしけならんもの、なれ【71才】よらんありさまいかはかり思ひまたらんとねたうも／ゆ、しうもさま／おほしやるに恋しく思ひいてられ／給て夜もまどろまれ給はず／□□しきたえの枕そうきてなかれぬるきみなき／床の秋のねさめに

五十三 狭衣、飛鳥井女君を偲ぶ

なにことよりもかの夢のおほつか／なさをいかなることそとき、あきらめてやみぬる／はいといふせくおほつかなどもよのつねなりいつれに／てもはか／しき人にはあらしをまことにさる事もあらはなれかほにもてなさんこそ心くるしうかたし／けなれまして年月へてか、みのかけもかはらぬさま／にていひしらぬものの中におひいてたらんよいてや／か、れはこそよからぬふるまひはすましきものなれ【71才】すこし人かすなるもの、かくあとはかなきやうやある／なにしかあなかに思ひかすまふきさることもあらし／としゐてあさきかたさまに思ひなせとよろつより／もこのおほつかなきかたのことはむねふたかりてあつ／まのかたへなとき、しもしさもあらはふせやにやおひいてんなとなを心にか、りて我御すくせのほど／くちおしうおほさる／□□そのはらと人もこそきけは、き、のなとかふ／せやにおひはしめけむつねよりも心ちよけならぬ／御ことくさにめなれにたる中にも此秋はむしの音／しけきあさちかはらにことならずなき暮し給ても／をのつからまきれ給心のつまと

かいひふるしたる【72才】夕暮の空きりわたりてありかさためたるくもの／た、すまゐうらやましようなかめやり給へるにしの山もとは／けに思ふ事なき人たにもあはれなりぬへきかり／さへ雲あはるかになきわたりてなみたの露もさか／りすきたる萩のうへに玉とをきわたしつ、なきよ／はりたる虫のこゑ／さへつねよりもあはれなるに／御まへのちかきすいかいのつらなるくれ竹をふきな／ひかしたる木からしの音さへ身にしみて心ほそくきこ／ゆれはすたれすこしまきあげ給へるに木、のこすゑ／もいろつきわたりてさと吹入たり／□□□せく袖にもりてなみたやそめつらんこすゑ色／ます秋の夕くれ【72ウ】□□□夕くれの露吹むすふ木からしや身にしむ／秋の恋のつまなるなどさま／恋わひ給てなみたを／をこい給へるてつきのうつくしさはた、かはかりをさいは／ひにてこの世の思ひ出にしつへしとそみえける雨さへ／すこしふりていと、きりふかく見えたる空のけしき／まことに物みしらんにみせまほしけなり又是涼／風暮雨天とくちすさみ給へるなときはの／もり秋またんといひし人にみせたらはいかにはや／きせにしつみいてんとはりなりかし

五十四 飛鳥井女君、入水しようとする

かの舟には／日かすつもるま、にちちもまことにあるかなきかに／なり行をかくてしなはむなしきからをこれかれ見／あつかはんもいみしうくちをしくなたうてなをいかて【73才】うみにいらんと思ひてさるへきひまをみるにさす／かに人めしけくて

日ころにのみなり行にこの大夫／よろつにうらみつ、ころものせきをうらみわふれと／おなしさまをのみなこやかにいへはさすかになされた／つ心にていとよはけなるさまを心くるしうおもひ／つ、ちかくもえよらざりけりか、る程に大貳の舟／にやむことなき人のなへての女房にはにぬかまし／りたるに心かけてかたらひありきけりよひすく／るまでみえぬほとをうれしと思ふほとにかゝること／をめのといとやすからすた、しきにも君のかくふ／しいり給へればそれこそかしのやうにておはせまし／かはかゝる事なからましと思ふにもいと、心うくつらう【73才】おほえ給へはをのか身をとさまかうさまもせため給よ／かゝる人のものいたく思ふはいみ侍なりたいらかにて／いのちあらはわすれかたふおほすらん人にもあひみさ／せ給てんいとをさなくいふかひなき人の御心はいか／なる人かあるなどいみしき事をいひきかすれとこの／大夫の見えぬおり／のいてきたるを我思ふことは／なりぬへきなめりと思ふよりほかの事もなければあ／なあはれなるにまかせてはみてあなち身に／もなしてかくうきめをはみするそかし身をなけ／たるあとにめのといかなるありさまにてなからへん／とさすかに哀にはかなくおほえ給へはいと、ねをの／みなきていらへもし給はねはうちむつかりてたち【74才】ぬるまにかしらもたけてつく／とおきのかたを見や／れは空はいさ、かなるうき雲もなくて月のさやか／にすみわたりたるにうみのおもてはきしかた行すゑ／も見えずはる／とみわたされたるによせかへるなみ／はかり見えて舟のはるかに消行か心ほそきこゑして／むしあけのせ

とへこよひとうたふもいと哀にきこゆ／□□□なかれてもあふせありやと身をなけくむし／あけのせとにまち心みんとて袖をかほにをしあて、／とみにもうこかれぬほとに人やみつけんとしつ心／なければなく／ひとへはかまはかりをきてかみかひ／こしなとするにありし御あふきのまくらかみにあ／りけるか手にさはりたるも心さはきせられてまつ【74ウ】とりてみればなみたにくもりてはか／しくもみえ／すすみはかりそつや／としてた、今かき給へるさま／なるにさしむかひたるおもかけさへふと思ひ出られこ／の世にて又み奉るましきそかした、いまかくなり／ぬるともしり給はていつこにかにしてかおはすらんね／やし給ぬらんさりともねさめにはおほしいつらんかしなど／よりほかは又なき心まとひなりす、りをせかひにと／り出てこの御あふきにもか、んとするにめもき／りふたかりでもわな、きてとみにもか、れす／□□□はやきせのそのものくすとなりనికిと扇の／風よふきもつたへよえもかきはです人のけはひ／すれはどうおち入なんとてうみをのそくいみしうおそ【75才】ろしとそ【了】

注「香」の下に「の」と傍記。

書誌情報

【請求番号】 九一三・三七／五〇〇四

【装訂】 四半本の袋綴 四冊

【書写年代】 近世中期写

【寸法】

一冊目（巻一） 縦二七・四cm、横二〇・三cm
二冊目（巻二） 縦二七・四cm、横二〇・二cm
三冊目（巻三） 縦二七・四cm、横二〇・二cm
四冊目（巻四） 縦二七・四cm、横二〇・二cm
なし

【表紙】

紗綾形地に蝶・蜻蛉散らし宝相華唐草文

【本文料紙】

色替わり染紙

【内題】

なし

【紙数】

一冊目（巻一） 全七五丁、二冊目（巻二） 全八六丁、三冊目（巻三） 全一一三丁、四冊目（巻四） 全一一八丁。各冊遊紙なし。

【字高】

各冊約一九・七cm

【半葉行数】

一二行

【一行字数】

二〇～二五字

【和歌表記】

歌は三字下り。一首二行書きで二行目は下がらず、また末尾は地の文に続く。

【書き入れ】

なし

【保存状態】

良。綴糸にほつれ、数箇所汚れありの状態であったが、日本語日本文学科収蔵後、綴糸は修繕済み。三冊目の裏表紙小口、四冊目の裏表紙にわずかに虫損あり。

【箱】

かぶせ蓋桐箱の表の中央に「中院右府通躬公筆狭衣全本 世恭審定」と墨書あり。箱の裏の中央には「中院通躬公 通茂公ノ子」と書かれた貼紙

【極書】

(縦一〇・一cm×横三・三cm)あり。現在は箱の一部が割れており帙で保管。

和歌短冊の包み紙と思われるものに、江田世恭による「中院前内府公誦 詠哥 享保十八年十二月廿一日實全朝臣任参議同月廿五日被参賀祝酒之席賜此一首」という極書あり。

※實全・滋野井実全（よゐま）。左記二月二日に参議に任ぜられ、二五日に拝賀着陣。この年に通躬は六六才。

【蔵書印】

各冊の一丁表に「清水泰蔵書」の朱正方印。

※清水泰・明治二九年(一八九六)―昭和四四年(一九六九)。国文学者。京都帝国大学文学部国文学科卒。立命館大学名誉教授。

付記

- 1 書誌情報の調査にあたっては富澤萌未氏(本学非常勤講師)の協力を得た。
- 2 本研究は科学研究費助成事業「狭衣物語諸本研究―三条西家本を軸にして―」(基盤研究(C)15K02224/研究代表者・神田龍身)による成果の一部である。